

「これは、おかみ、御氣分が日ましにおよろしうございまして、お芽出たうございませう、」

「何時も見舞に來てくれるさうだが、どうも人に逢ふのがおつくりで、逢はざつた、よく來てくれた、」

「ありがたうございます、」

「祝ひに鯛をくれたさうだが、生た鯛は、暫らく見ざつた、容堂の眼は四人の壯俊の手で支へられてゐる大桶へ往つた。それか、」

「は、斜めに大桶のはうへ眼をやつて、さやうでございませう、つまらんものでございませうが、爺が心ばかりのお祝ひでございませう、壯俊のはうをはつきり見て指を脱着石へやり、此處だ、」

壯俊も容堂の前であるから微かな音もしないやうに大桶をおろして引きさがつた。容堂は熊笹の上へ眼をやつた。

「何處の鯛だ、」

「房州でございませう、」

政五郎は熊笹を撮みあげた。熊笹の下には二尾の大桶が黄いろな鱈を見せてゐた。

「うん、太い、太い、」

容堂の後には重頼と元治が來て立つてゐた。元治は無邪氣であつた。

「此奴は、うまい、」

容堂は莞として元治を見た。

「忠七、喫ふか、」

「は、」

「よし、それぢや、長兵衛と二人に喫はさう、山中も相伴せえ、」

長兵衛は重頼の通稱であつた。政五郎は頭をさげた。

「ありがたうございます、」

「それにしても、山中、うまく持つて來たものだな、此の暑いに、よく途中であがらざつた、やつぱり、其のはうがすることには、そつがない、」

「恐れいります、」

「豪い、豪い、」

其處には三敬もゐた。容堂は三敬を眼で招いた。

「三敬、啓太郎に云ひつけて、皆に鯛を喫はせ、」

「は、」

「わしは、うしほがあればええ、」

「は、」

三敬は往つてしまつた。容堂は室へ入らうとして政五郎に氣が注いだ。

「其のはうも、今あがつて來い、忠七がまたりきみよる、」

政五郎は莞とした。



「は、それでは汗を落しまして、お室の端をけがします、」  
容室は室の中へ入つて往つた。重頼と元治が後から跟いて往つた。政五郎は其處で庭の潜門の近くにゐた壯俊を呼んだ。

「おい、桶を、お庖厨のはうへまはしてくれ、」  
壯俊はそれと聞いて走るやうに來た。

「いけねえ、そさうがあつちやいけねえぞ、」  
壯俊はびりつとしたやうにして足を停め、それから慎みぶかい歩きかたをして、大桶の傍へ往つてそれを抱へた。

「そさうがあつちや、いけねえぞ、」

政五郎は壯俊を伴れて、潜門を出て庖厨のはうへ往つた。庖厨の縁側では三敬と啓太郎が何か話してゐた。三敬は政五郎を迎へた。

「山中さん、あなたは皆さんと御いつしよですが、壯俊さんがひもじいでせうから、何時もの處へ準備してあります、早く御飯をあげてください、」

「それはどうも、すみません、壯俊のはうを見て、それぢや、それをお鹽梅處へおいたら、御飯をいただくがいぜ、」

壯俊は軽く頭をさげて横のはうへまはつて往つた。政五郎は三敬に聞いてみたいことがあつた。政五郎は三敬の眼を待つてゐた。

「二宮さん、今日はお愛さまは、」

「駿河臺の後藤さまへ、ちよつと御挨拶にあげまして、それからお里のはうへ、おまはりになるやうで、今朝ほどお出かけになりました、」

### 六八

新助は微醺の佳い氣もちになつてゐた。馬のやうに長い額に横皺の多い新助の顔はゆるんで、皺ものびてゐるやうに思はれた。水貝の皿、奴豆腐の皿、枝豆の皿などが膳の上をにぎはしてゐた。四疊半の茶の室の庭に面したほうには、小さな葎簀をつるして、其の前になつた濡縁には、蘭や萬年青の鉢を五つ六つ置いてあつた。其處には簀に近く一株の青桐があつて、油蟬が午の暑さに喘いでゐたが、新助の耳には觸らなかつた。

「おい、お兼、遅いぢやねえか、後藤さんで引きとめられてるぢやねえのか、」

新助は駿河臺の後藤邸から廻つて來ることになつてゐる女の愛子を持つてゐるところであつた。女房のお兼は土室の洗槽で何か洗つてゐた。

「さうだね、さうかも判らないよ、」

「いや、きつとさうだ、さうに定まつてるのだ、太政大臣の三條さんと、肩をならべようと云ふ後藤さんでも、愛から見れや、御家臣だ、妾と云つたところで、奥方がねえのだから、愛は奥方のやうなものだぜ、其の奥方に、時刻ぢやねえか、午食もあげないで、お茶一ぱいで歸すことはできねえよ、」

「それや、さうだよ、時刻だからね、あれも久しぶりに、己の家で午食を喫つてみたいだらうが、」



新助が思ひだしたことがあつた。

「あれは、文鯨魚の魚軒が好きだつたな、」

「さうよ、文鯨魚の魚軒が好きよ、おまへさんが好きで、あれに喫はしたから、それで好きだよ、」

「それや、さうだよ、兒はなんでも、親のすることを見習ふものさ、だからよ、薩長士と云はれた、土佐の殿さまの眼にとまつたのだ、やつぱり親の躰なんだ、これが御一新前だつたら、隠居しても天下の隠居でとほつてる殿さまだ、愛に男の子でもできてみる、今の殿さまの次には、きつと土佐二十四萬石の殿さまになつて、俺はさしづめ御家老だ、どうだ、おい、新助はぐつと盃の酒を飲んで、「さうなれや、板垣さんも、後藤さんも、俺の乾見だ、」

「さうだよ、御時勢がかはらなかつたらね、」

「それだ、御時勢がかはつて、御一新の文明開化だ、だから、殿さまから、望みとあれば、槍一筋の侍にとりたててやると云つてよこした時、當節は、槍も摺子木もおんなじだつて、ほんと斷つてやつたぢやねえか、おい、槍も摺子木もおんなじだつてよ、」

「だから、おまへさんのことを、さすがお愛さんのお爺さんほどあるつて、他が云つてるのだよ、」

「さうさ、酒を飲んで、太平樂をならべてると、おめへまでが俺を癪にするが、おい、しつかりしろ、俺は何もかも判つてるのだ、判つてるからこそ、今度のことだつてさうぢやねえか、」

「それや、さうだよ、御時勢がかはつたからね、」

「かはつたとも、それに二十四萬石つて、聲はたいしたものだが、殿さまが費つちまつて、ないしよは苦しいの

だよ、みる、愛が落籍になつた時でさへ、世間では、千兩箱はきつともらつたらうと云つてるが、どうだ、金札が二百枚、百五十兩ぢやねえか、田舎の大盡でも、女を落籍したら、それくらゐの金はよこすんだ、」

「さうだよ、ほんとに二十四萬石は、みかけだふしだよ、」

お兼は何時の間にか来て上框へ腰をかけてゐた。お兼は横肥満がしてゐた。新助はお兼を見た。

「だからよ、だから、俺が見きりをつけたのだ、まごまごして、お陀佛になられてみる、あふはち執らずだよ、」

「ほんとだよ、」

新助夫婦は容堂の健康に見きりをつけて、體のいいあひだに愛子の暇をもらふとともに纏まつた金をもらひ、愛子が柳橋にゐる時の客であつた桐生の機屋へ嫁にやらうとしてゐるところであつた。

「今なら殿さまの顔もあるから、いくら内所が火の車でも猫の仔を棄てるやうなことはしねえだらうよ、そこは土佐の御隠居の顔だ、どうにかならうぢやねえか、それにさ、小煩さい御家臣衆でも、殿さまがかうと云や、尻みのきく殿さまのことだ、御家臣衆だつてどうにもならねえや、」

「それに桐生のはうが、うまいぐあひだし、思ひだして、「どうだらう、来るだらうかね、」

「来るさ、もともと向ふは血路をあげると云ふぢやねえか、」

「それや、さうだよ、柳橋にゐる時から、大騒ぎをしたと云ふのだよ、」

「さうだらう、だから二十四萬石のはうが、うまくいつてよ、それで、桐生へく来てやれあ、だいちあれが幸だよ、」



「それやさうさ、土佐の御隠居さまのお妾と云や、傍で見ると、たいしたものだが、本人は気がね氣苦勞で、らくらくと手足をのぼして休むひまもないのだよ、それに機元だから、現金はあるしさ、」

「さうだとも、威ばつた顔をしてても、年貢米を金にしなくちや、金がねえと云ふ殿さまたあ、わけがちがはあな、」

「さうだよ、だが、二十四萬石のはうが、面倒だよ、」

「なにしろ小煩さい御家臣衆つてのがついてるからな、だが、いい、殿さまが眼の黒いうちは、大丈夫、」

「大丈夫だらうかね、」

「大丈夫とも、盃を出して、どうだ、一ぱいやらねえか、前祝ひぢやねえか、」

「さうね、飲むと山室さんがいらした時に、困るのだが、」

それでも厭ではないらしい。

「なにも困ることはねえぢやねえか、此方が酔つぱらつてやるが、功德になるだらう、」にやりと笑つて、「しらふでゐられちや、きまりがわるいぜ、」

「さうね、」

お兼も口元に微な笑ひを見せて踊りあがつて膳の前へ來た。新助はそれに盃をやつた。

「おい、どうだ、さうぢやねえか、氣をきかしてやるものだけ、」

「さうね、」

新助は銚子を持って酌をしてやつた。新助はますます佳氣もちであつた。

「だから四五はい飲んで酔つぱらいなよ、」

「白晝から酔つぱらつたら、用ができないよ、」

「たいした用もねえぢやねえか、山室さんの鹽梅なら、裏の媼さんに頼めやいいし、お酌はお愛のお手のものぢやねえか、用もねえのに、媼さんなんか、あんまり傍へいかねえがいいや、」

「さうもいかないよ、お客だと、」

お兼は飲んだ盃を新助の前へ出した。

「あいよ、」

新助は銚子を持った。

「もう、一ぱい重ねろ、」

「あんまり酔つぱらつてちや、お愛にきまりがわるいよ、」

「なにがきまりがわるいのだ、己の生んだ見ぢやねえか、」

「だつて、お愛にばかり、苦勞さしてちやないか、」

「其處が親孝行だよ、親のために、身の皮を剥いでも、いとはないのが孝行だ、だから親孝行する者には、天のむくいがある、兒が手足まとひになつては、親孝行ができねえと云ふので、兒を埋めるつもりで、穴を掘つて、黄金の茶釜が出たのだ、それが天のむくいだよ、だからお愛だつて、親に孝行してるから、からつけつても二十四萬石の殿さまのお妾になるし、それがうまくお陀佛にならないうちに、お暇をもらひの、桐生へ往かうと云ふ寸法ぢやねえか、」



お兼は新助の顔をまじまじと見てゐた。

「さううまくいくか、ねえ、」

「いくから飲みなよ、」酒を注いでやつて、「これと云ふのも、親の躰がいいから、兒が孝行ができるのだ、だから此方は、おほ感ばかりぢやねえか、親の躰がいいので、孝行ができるし、孝行ができるから天のむくいがあると云ふものだ、どうだ、」

お兼は盃を口へやつてにやりと笑つた。

「すこうし、其の理窟は、へんぢやないか、」

「なにがへんだ、これが人間の道理だ、」

玄關の立てつけのわるい格子扉がしがしと啓いた。

「来たのだよ、」

お兼はいきなり起ちあがつた。新助はほとんど無意識に肌を容れた。同時に咳の聲がした。

「ごめんなさい、」

それは男の聲であつた。

「山室さんか、」

### 六九

お兼ははだけてゐた襟元をつくるひ、櫛を脱つて縮れのある鬘の毛を掻き掻き往つた。玄關の障子は一枚啓け

てあつた。其の玄關の土室に、越後楊締を被て紺地に紺の一筋獨結の博多帯を締めた、三十前後の角顔の男が来て立つてゐた。それが桐生の襦袢の山室清七であつた。

「今日は、」

「ようこそ、たいへんだつたのでせう、お暑くつて、」

「どうもお暑うございます、おかはりはありませんか、」

「ありがたうございます、さあ、どうぞ、」

「愛ちゃん、今日は、」

「もう、おつけ来ようと思ひますよ、さあ、どうぞ、」

「さうですか、」

すぐあがるのもへんであるから手にしてゐた扇をぱちりと啓けて胸のあたりを扇いだ。お兼は客の氣もちが判つた。

「さあ、どうぞ、いいですよ、おあがりなさいませよ、」

「ありがたう、」

「ほんとに、さあ、どうぞ、遠慮なさらないで、さあ、どうぞ、」

「さうですか、」

清七は扇を疊んだ。お兼はすぐ傍の階段の口へ往つた。清七はお兼を追つてあがつて来た。お兼はそこで階段のぼつた。



「さあ、どうぞ、二階はいくらか涼しいですよ。」

「どうもすみません。」

清七は上へあがった。二階は六疊一室の何もない室であつた。お兼は東向になつたはらの窓の障子を啓けた。窓の前に隣の柿の木があつて蟬の聲がしてゐた。

「これは、涼しい、柿の木がありますね。」

「隣ですよ、冬はじやまつけでしかたがないですよ。」

お兼は一ぱりの壁厨を啓けて麻の蒲團を出した。清七は其のうへにゆつたりと腰をおろした。清七はもう平生の氣もちになつてゐた。

「今、お茶を持つてまゐりますが、冷たいはうがよろしいのですか、麥湯もありますか。」

「さうですか、それぢや麥湯をいただきますか。」

清七は持つてゐた扇をおいて懐へ手を容れた。お兼は見ないふりをしてそれに眼を注げてゐた。

「それぢや、麥湯を持つてまゐりませう、今朝から井戸へ浸けてありますから、冷たくなつてゐるだらうと思ひますが。」

「どうもすみません。」

「それぢや。」

お兼が往きかけると清七が顔でとめた。

「ちよつと、おつかさん。」

「わたし。」

お兼はつとめてすまして揮りかへつた。

「ちよつと、清七は紙に包んで小さくした物を出して、「何かと思つたのですが、宿からすぐ轎で来たものですか、何も持つて来なかつたのですから。」

新助は盃を持つてゐた。腹實に微な風があつた。

「涼しいや、風は涼しいし、酒はうまいし、それに襦袢の金庫に手が達いたし、ひつかかりのあるのは、みかけだふしの殿さまだが、頭を左右に揮つてから、「しかし、それもたいしたことはねえや。」

新助は夢中になつてゐた。何時の間にかお兼がおりに来てゐた。

「なに、云つてるの、おまへさん、獨言なんか云つてさ。」

新助はびつくりして顔をあげた。お兼は啓けかけた紙包を持つてゐた。

「ちよいと、これだよ、お土産がはりにつて、よこしたのだよ。」

お兼の聲は小さかつた。

「いくらある。」

「いくらと思ふの、太政官の五兩札だよ。」

「さうか、やつぱり豪氣なものだな。」

「餅菓子なんかた理が違ふよ。」



「豪氣なものだ、だから、大事にしくちやいけねえぜ。」

「だから大事にしてるぢやないか、麥湯がいいと云ふから、麥湯を持つて、それで何かを出しといて、鹽梅をさう云つて来るよ。」

「さうさ、さうしくちやいけねえ、早い方がいいぜ、お愛も今に来るだらう。」

「お午の御饗應になつてるにしても、もう来さうなものだが、」麥湯を思ひだして、「それぢや、これをおまへさんに渡しとかうか。」

お兼は紙包を前へ出した。新助は願でそれを押へた。

「めんだうだ、平生の處へしまつとけ。」

「さう、それぢやしまつとくよ。」

お兼は次の室へ往つたが、すぐ出て来て土室へおり、それからことごとやりだした。新助はまた何か考へてゐた。

「豪氣なものだ、一貫や二貫で、餅菓子でも持つて来るのが關の山だが、五兩たあ、えれえや。」

お兼は二三度二階へあがつて往つたが、まもなく庖厨口から下駄をからころ云はして出て往つた。新助は氣が注いだ。

「嬢さん、しだし屋へ往きあがつたな、彼奴もぬけ目のない奴だ、それからまた考へこんで、「まあ、いや、世間はどえらい不景氣だが、家だけは何處を風が吹くかだ、ありがてえや、女封に入つたのだ、」

文關の格子戸を急がしさうに啓けて入つて来た者があつたが、それが親しい者のやうに其のまゝあがつて来た。

「今日は、おつかさん、」

それは愛子の聲であつた。新助は顔をあげた。

「お愛か、待つてたのだ、待ちかねてたのだ、」

「おとつさん、」

「さうだよ、此方へ来なよ、」

「おつかさんは、」

愛子は唐草模様の附いた縮緬の包を手にしてゐた。新助は其の顔を待つてゐた。

「おつかさんは、しだし屋へ往つてるのだ、暑かつたらう、さあ、帯でも解いて、風を容れるがいいや、」

「何人も来てやしないの、」

「桐生の山室さんが來てるのだ、」

「さう、來てるの、」

「今のさき來たのだ、」

「さう、」

「とにかく途中はたいへんだつたらう、水で顔を洗つたら、後藤さんに今までのめたのか、」

「さうよ、」

「話もいいだらう、」

愛子は浮かぬ顔を見せた。



「それがよくないの、」

新助は飛びあがるやうにして座りなほした。

「なに、なんだつて、」

愛子もそれに勢を得たやうにべつたりと座るなり包を傍へはうりだした。新助は精しいことを早く知りたかつた。

「ぜんたい、どうしたと云ふのだ、後藤さんが何か云つたのか、」

「云つてたのですよ、」

「なんと云つてたのだ、」

「今、そんなことを云ふばあひぢやないつて、憤つたのですよ、」

「憤つた、今、そんなことを云ふばあひでないかと云つてか、」

「さうよ、」

「なにが、今、そんなことを云ふばあひぢやねえのだ、殿さまの病氣が癒つてるから、良い時ぢやねえか、」

「さうよ、」

「それで、おまへは、何時か下村さんに話したやうに、體がわるいからと云つたのだらう、」

「さうよ、」

七〇

愛子は容堂の疾患がやや良くなつたとき、下村啓太郎にまで健康のことを理由にして、それとなしに暇をもらひたいと云つてあつたが、其のうち山室のほうと話ができたので、其の日後藤象二郎に交渉したのであつた。新助は後藤から手の達いてゐる幸福の邪魔をせられてゐるやうで腹がたつた。

「御一新になつて、町人も侍も、殿さまも三助も、同格になつてるのだ、殿さまが病氣になつて困るなら、此方が病氣になつても困るぢやねえか、殿さまの病氣には、天地がひつくりかへるやうな大騒ぎをしながら、此方が病氣になつて、養生させねえと云ふ法が何處にある、後藤さんだつて、御一新の事業には、一口乗つてやがるせに、ふざけてやがる、それで後藤さんは、いけねえと云ふのか、」

「いけないとは云はないが、いけないとおんなじぢやないか、」

「それや、さうだ、」

「それにさ、あんたは、おかみが中風だから、癒つてる時に、暇をもらはないと、金にならないから、そんなことを云つてるだらうが、けしからん、人間の道にはづれてると云ふのですよ、」

「な、なんだつて、人間の道にはづれてる、土佐の田舎侍が何云やがるのだ、癒つてるときに、暇をもらはないと、金にならない、だいち、そんなきたねえことを考へつくなんて、ふざけてやがる、大きな面をしてても、平生、そんな、きたねえ、あさましいことを考へやがる野郎だ、何云つてやがるのだ、」

「ほんとに後藤さんもずるぶんよ、」

「なに、かまふことはねえ、ふざけたことを云や、はいさやうならをきめるのだ、二十四萬石と威ぼつたつて、内所は火の車だ、鏝一文もらはねえと思や、どうにでもなるのだ、病氣で養生するに、歸つて来たところで、



手討もできねえだらう、ふざけやがるな、」

新助は唇に涎沫をからめてゐた。

「ほんとに、後藤さんもずるぶんよ、」

「ふざけてやがる、それで結局は、どうなのだい、」

「それが、今、そんなことを云ふ時でないのだから、」

「それぢや、御家臣衆に相談するとも云はなかつたか、」

「云はないわよ、」

「それで、おまへは、なんと云つて歸つたのだ、」

「とにかく、體がわるいのですから、お願ひしますつて歸つて來たのよ、」

「ふざけてやがる、」

お兼が庖厨口から入つて來た。

「暑い、暑い、眼がくらくらしさうだよ、」愛子を見つけて、「おや、いらつしやい、」

愛子はお兼を見た。

「今日は、」

愛子の口は重かつた。お兼は新助を見た。

「どうしたの、來るさうさう、何を云つたの、」

新助は眼を光らしてゐた。

「なに、後藤さんが、ふざけたことを云やがるさうだから、俺が憤つてるのだ、彼奴ふざけた野郎だ、俺が承知しねえ、かうなれや、此方も意地だ、承知するものか、ふざけてやがる、」

お兼もただごとでないと思つたので、つかつかとあがつて愛子と並んで座つた。

「後藤さんが、どうしたと云ふの、」

お兼の眼はしぜんと愛子へ往つた。愛子は傍の團扇を執つて胸のあたりを扇いでゐた。愛子は氣をおちつけてゐた。

「なに、今日、後藤さんへあがつて、彼の話をしたのですよ、すると、後藤さんが、今、そんなこと云ふばあひぢやないつて、憤つたのですよ、」

新助は愛子の詞がなまぬるく思はれた。

「いけねえ、殿さまの病氣が癒つてる時に、暇をもらはないと、金にならねえから、そんなことを云つてるだらうと云やがつたのだ、よくも、そんなきたねえことを云やがつたものだ、平生、きたねえことを考へてるから、そんなことが口に出るのだ、ふざけてやがる、」

「さう、」

さうと云つたがお兼は新助のやうに憤る氣になれなかつた。疾患が癒つてる時に暇をとらなければ、金にならないと云つて愛子に暇をとらずやうにしたのは、新助と己とではないか。新助はお兼が平氣であるのが續にさはつた。

「さうつて、なんだ、おめへは、何とも思はねえか、病氣が癒つてる時に、暇をもらはないと、金にならねえか



ら、そんなことを云ふだらうなんて、ふざけたことを云はれて、平氣である奴があるか、」

「平氣でのやしないが、此方だつてねえ、愛子を見て、「ねえ、おまへ、ほんたうはさうなのだから、」  
愛子も酸ばいやうな顔をした。」

「それや、さうね、」

新助は立つてゐる脚下の沙を掻きのけられたやうで、それがまた頼にさはるのであつた。新助は冷たくなつてゐる酒をくつと飲んだ。

「だめだい、おめへたちが、そんなことぢや、つがふよくいくことでもいかなくなるのだ、俺だつて慾を知らねえぢやねえから、腹んなかはそれでめてもよ、後藤さんとも云はれる、りつばなかたが、かんぐりやがつて、そんなことを云ふたあ、けしからんぢやねえか、そんなきたねえことを云やがるのは、」

お兼の顔はやはらいであつた。

「それやねえ、此方のことをかんぐらなくつてもいいのだよ、」

「さうとも、そんなことをかんぐる手まで、早く暇をもらつてくれるやうにしてくれるのが、これまでのよしみぢやねえか、愛子さん愛子さんなんて胡摩をすりやがつて、殿さまの前をつくらつてもらつたくせに、其の恩義もわきまへねえでふざけてやがる、もし、お愛が腹のわるい奴で、後藤さんはこんなことをした、こんなわるいことをしたと云や、詰腹か、手討か、輕くて追放さ、ふざけてやがる、」

お兼は新助の氣焰よりも精しい事情が知りたかつた。

「それで、だめだと云ふのかい、後藤さんが、」

「さうよ、今、そんなことを云ふばやひぢやないと云ふのですよ、」

「それぢや、何時がいいだらうね、」

「さうね、憤つたから、わたしもあまり云はなかつたのよ、」

「それぢや困るぢやないか、」

新助が口をいれた。

「なに、かうなれや、遠慮することはねえ、へいさやうならなをきめつちまふさ、」へいさやうならの端には清七がつながるのであつた。「おい、お客さんを、ほつたらかしといぢや、いけねえぜ、」

お兼はもう起つてゐた。

「さうよ、お酒を持つてくるから、鹽梅が來たら、お愛に持つて來てもらうよ、」

お兼は長火鉢の銅鉗につけてあつた酒を持つてあがつて往つた。新助は愛子を見た。

「どうだ、殿さまの容態は、すぐ、またおこりさうにねえのか、」

「今のところ、そんなふうも見えないのですが、なにしろ二度ですからね、安心はできませんよ、」

「さうとも、今度おきたら三度目だ、口なんかどうだ、」

「いくらかへんなどころがあるのですよ、」

「さうだらう、それから手足はどうだ、利かないところはねえのか、」

「何もおつしやらないから、判らないのですが、いくらかどうかしてゐるのですよ、」

「さうだとも、記憶はどうだ、」



「人の名なんかよく忘れるのですよ、」

「さうだらう、やつぱりさうか、だが、まあ、よくそれまでに癒つたことだ、二度も中風をやつたら、口がきけねえとか、體の半分が痺れるとか、どうかなるものだが、幸がいいなあ、」

「さうですよ、幸がいいのですよ、」

「殿さまの幸はいいが、おめへの幸はわるいのだよ、」

「さうですよ、」

「それで、おめへ、どうするつもりなのだ、」

「どうつて、そのうちには、なんとかなるのでせうよ、」

「それや、まあ、どうにかなるだらうが、まごまごしてて、またおきたら、たいへんぢやねえか、今おきたら、もうだめだぞ、病氣が病氣ぢやねえか、それで、其のまま致つちまはれちや、それこそあぶはちとらずだぜ、」

「さうね、」

「だから、早く道をつけなくちやいけねえや、」

「それぢや、どうしたらいいの、」

「どうするつて、俺は下村さんを知つてゐるから、下村さんに往つてかけあはうか、」

「下村さんなら、わたしもなんでも云へるし、お菊さんの關係もあつて、いちばんいいのだけど、下村さんは三太夫だから、おかみの前ぢや、頭があらないしね、おかみの前で、りつぱに口がきけて、おかみが一目おいてらつしやるのは、やつぱり、板垣さんと後藤さんですからね、」

「さうかなあ、板垣さんと後藤の唐變木か、しまつがわるいな、」

「板垣さんも、己では新橋で、小清さんと云ふ歌妓を落籍して行くせに、他のこととなると、むづかしい方だか

ら、」

「ふざけてやがる、土佐つぼの僧父は、」

岡持を持つた舞一つの壯伎が抱厨口からのつそりと入つて來た。それは註文の鹽梅を持つて來たところであつた。新助は感ばつてゐた。

「何處かそこいらへおいとけ、」

壯伎が歸つてゆくと、愛子は帯の間から小さな鏡を出してちよつと顔を映し、それから三つ四つある其の鹽梅の皿を益へ載せて二階へあがつて往つた。

二階ではお兼が清七をもてなしてゐた。清七は階段の意旨によつて愛子のあがつて來たことを知つたが、きまりがわるいのですぐ眼をやることのできなかつた。

「いらつしや、」

## 七一

愛子はしやあしやあしてゐた。清六は顔をあげた。

「や、暫く、」

清七はゆとりのあるところを見せなくてはならなかつた。愛子は右側へ來て座つた。



「ほんとに暫くね、おかはりもなくつて、」

「ありがたう、あなたも御無事で、」

「無事は無事ですが、其の無事がたいへんな無事なのよ、」

それは容堂の病氣のことを云つてるだらうが、音に聞えた土佐の御隠居に愛幸せられて、權勢のある地位に居ることは他の羨む階級ではないか。清七は愛子が己を嘲るやうな云ひまはしかたをするのがふしぎであつた。

「しかし、佳い御階級ぢやありませんか、」

「たいへんな御階級よ、籠の鳥のやうに、往きたい處へも往けないし、手足をらくらくのばすこともできないし、なさない御階級ぢやないの、何が佳い御階級なの、」

わがままはできないにしても、衣食はもとよりのこと、願うても得られない地位ではないか。

「さう云やあさうかも判りませんが、ほんとに佳い御階級ぢやありませんか、」

「癪、ねえ、母親のはうを見て、ねえ、おつかさん、」

お兼は清七の眼の動きに注意してゐた。

「さう、ねえ、二十四萬石と云や、ばかに聞えはいいが、ねえ、」

清七はお兼を見た。

「山内さんは、たいへんお金があると云ふぢやありませんか、」

「それがあるならいいのですが、ねえ、」

「ないのですか、山内さんは、たいへんなお富豪だと聞いてますが、」

「それがたいへんな貧乏だから困るのですよ、もとはあつたのでせうが、彼の御隠居さまがつかつてしまつて、今は火の車ですよ、」

「ほんとですか、」

愛子が口をいれた。

「ほんとよ、火の車がくるくる廻つてゐるのですよ、それも錢金のこととは、考へやうで、諦めもつきますが、中氣ぢやしかたがないぢやないの、」

「それやさうですが、もういいのでせう、お嬢になつたのでせう、」

「今は癒つてゐるのですが、二度目の中氣ぢやないの、何時どうなるか判つたものぢやないのよ、」

「それやさうだ、」

「だから、たいへんな御階級だと云つるぢやないの、わたしの身にもなつて下さいよ、」

「それや、さうだ、」

お兼は清七への響應がおろすになつてゐるのに氣が注いだ。お兼は愛子を見た。

「おまへ、お酌しなさいよ、」

愛子は何處までもしやあしやあとしてゐた。愛子は銚子を持つた。

「おあがりなさいよ、」

清七は習慣的に頭をさげた。

「へい、」



愛子は莞とした。

「お殿さまの前にでもゐるやうぢやないの、そんなに堅くはくしくしないで、おあがりなさいよ、」清七の出した杯へ酌をして、「今年になつてから、病人の介抱ばかりで、らくらく手足をのばしたことがないから、今日は久しぶりにゆつくりしますよ、」

清七は返事にこまつた。

「ああ、」

清七はあいまいなことを云ひながら杯の酒を飲んだ。愛子はまた莞とした。

「わたしにもくださいよ、久しぶりにただかうぢやないの、」

清七は愛子が何處までも碎けてくれるので、氣もちがのびのびとなつた。清七は杯を愛子へさした。

「それぢや、」

盃には双方の指がかかつてゐた。それは長上に獻する盃であつた。

「たいへんなお盃ね、」

愛子は軽く受けた。お兼は體をもぞりとさした。

「わたし、ちよつと下へ往くから、お客さんにね、」それから清七に、「どうか、こゆつくりなすつてくださいませ、」

お兼はもう起つて室を出て往つた。清七は銚子を持つてゐた。

「山室さんにお盃をもらうのは、幾年ぶりになるの、」

「さうだ、もう五年になりますね、」

酌をするのもうやうやしかつた。愛子は莞とした。

「お殿さまにお酌をするやうね、」

清七はきまりがわるかつた。愛子はすぐ盃を口へ持つていつた。

「どう、山室さん、癪に恐れいりたてまつるぢやないの、」

「それは、なんですからね、」

「なにが、なんですからなの、」

「それでも、今は、昔のお愛さんぢやないのだ、」

「二十四萬石のお妾さん、」

「さうですよ、」

「癪、ねえ、山室さんは、盃をぐつと乾して、「おあがりなさいよ、癪、ねえ、此の人は、いやよ、そんなことを云つて、」

清七は盃をもらつた。

「だつてさうぢやありませんか、昔はともかく、今は階級がちがふぢやありませんか、」

「いや、ばか、そんなことを云つて、いくら、階級がりつばでも、めかけ、てかけは、人の玩弄ぢやないの、それもちやんとした人のお妾ならまだいいが、銚子を持つて酌をして、「中風の、よいよいさんの、御介抱をさせられるぢやないの、やりきれないわよ、」



「さう云やさうかも知れませんが、それでも、」

清七は盃を口にして後の詞をにこした。愛子は清七と眼をあはした。

「もうたくさん、それより、わたしは、久しぶりに、のびのびとしたいから、それをあげてくださいよ、」

酒を飲んでますます軽い氣もちになつてくれることは、願うてもないことであつた。清七はうれしかった。清七は急いで盃をあげて愛子にさした。

「それでは、」

清七は盃を出した。其の清七の盃を持った指へ愛子の指がやはらかに來た。

「幾歳になつたの、」

清七は體がじんとなつた。清七はまごまごした。

「幾歳になるのよ、」

「三十二、」

「三十二、」

「さうです、」

「さうですなんて、何故、そんなあらたまつた口をきくの、」

清七はもちまへの氣になつて來た。

「それでも、もつたいないですからね、」

「また、そんな、」

愛子のいつばりの指が膝頭へ來た。

「た、た、いたた、」

「痛い、」

清七は體を軽く揺すつた。愛子のむし笑ひに笑ふ聲がした。

「痛い、」

「いた、た、いた、」

清七のいつばりの手は膝に來てゐる愛子の手首へ往つた。

「かうしてもいいのですか、」

盃のはうへ來てゐる愛子の指が思はず除れた。愛子は聲を出して笑つた。

## 七二

綾瀬草堂の薄暮は靜であつた。容堂の許には宇和島の伊達宗城が來てゐた。宗城は容堂の疾病がよくなつたので、其の祝ひに來たところであつた。容堂はコップを持つてゐた。

「どうもいかん、ふけいきな病氣にかかつたから、しかたがないが、どうもこれは、」

容堂は葡萄酒を飲んでゐた。宗城は無論日本酒であつた。宗城は容堂が葡萄酒を飲んで狼俣の特色を發揮することのできないのが、氣のどくでもあれば痛快でもあつた。

「葡萄酒の美酒夜光の杯と云ひますが、やつぱり日本人の口には、日本の酒があひますね、」



「さうとも、王翰の涼州詞は、初唐七絶の白眉だが、葡萄酒はいかん、酒は灘の生一本にかぎる、」

「それでは、秋口から、日本酒にならざるがよろしうございませう、」

「秋口まで、待たされちや、たまらん、」

傍には三敬がゐる。容堂と宗城にかたみがはりに團扇の風を送つてゐた。室の中には蚊除をかねて香をたいまつた。容堂は三敬を見た。

「おい、三敬、匂だけ嗅いでみようか、」

匂だけ嗅いでみよかとは、すこし日本酒を飲んでみようかと云ふことであつた。三敬は醫師から注意せられてゐるうへに、後藤からも云はれてゐるので困つてしまつた。三敬は團扇をおいて頭を疊の上へやつた。

「おかみ、それだけは、醫師からくれぐれもとめられてをりますから、どうかただ今のところは、」

「おい、三敬、さきまはりをしちや困るぞ、余は匂を嗅むと云ひよるぞ、飲むと云ひよりはせんぞ、」

容堂はにやりと笑つて宗城を見た。三敬は頭をあげなかつた。

「それは、其の匂をお嗅みになり、盃をお持ちになつてをりますと、つい、知らず識らず、めしあがるやうになりますから、どうかそればかりは、」

「つまらんことを云ふな、己の體は己で知つちよる、」

「それに後藤さまからも、くれぐれも云はれてをりますから、」

「後藤の下戸に酒徒のことが判るか、あれは鬪と女のことしか判らんぞ、」

それからうへ争へば卍糖玉の破裂であつた。三敬は宗城にすがるより他に道がなかつた。三敬は宗城のはうへ

頭をやつた。

「伊達の殿さま、おかみが、あんなに申されますが、いかがでございませう、」

宗城はほろりと酔つてゐた。

「あがらないで、匂を嗅がれるなら、いいぢやないか、」

三敬は銚子と盃を持つて来るより他にしかたがなかつた。

「は、それでは、」

三敬はやつとこざと起つて往つた。宗城は容堂を見た。容堂は所有の血塗のした眼を見せてむつりしてゐた。

宗城は容堂に酒を飲ますことが心配になつてきた。

「山内さん、やつぱり日本酒は、わるくありませんか、」

「なに、ええとも、日本人が日本酒を飲むでをれや、まちがひはない、毛唐の酒なんか飲みよると、八百萬の神

がみに叱られる、」

「それやさうです、」

「それだから、あんたも飲まれるがええ、」

「それぢやいただきませう、」

宗城が盃を執りあげたところで、角顔の三十がらみの鬨間のやうな男が、盆の上へ銚子と盃を載せて持つて来た。

「へい、どうも、歌妓がまゐりました、」



それは滑稽俳優の玩入であつた。容堂は鼻眞にしてゐる權之助が時をり伴れて来る飄輕漢を知つてゐた。

「お、お、」

玩入はべつたり座つて平蜘蛛のやうになつた。

「今晚は、ありイ、」

玩入は宗城に呼ばれて来たところであつた。宗城は此の滑稽俳優を招いて容堂を慰むべくあらかじめ使をやつてあつた。

「来たか、」

「どうもありがたうございました、歌妓はお化粧に手まがかかりまして、つい遅くなりまして、まうしわけがございせん、」

「お化粧ぢやなからう、また、其のあたりをほうつき歩いてをつたでおらう、」

「どうつかまつりまして、」

「いいから、早く、老公に御酒をさしあげろ、」

「へい、これは、」

玩入は容堂の前へにじりよつて盃をわたして酌をした。愛子が三敬といつしよに入つて来た。愛子は己の家から遅く歸つて化粧をあらためてゐたところであつた。容堂は愛子のはうへ盃を出した。

「おい、匂を嗅むぞ、」

愛子は莞として其の傍へ往つた。

「お體にお觸りになるやうなことは、」

それはさも容堂の健康を心配してゐるやうな口のききかたであつた。

「なに、嗅むくらゐなら、大丈夫ぢや、」

「それでも、」

「ええ、ええ、まあ見てをれ、」

容堂は其のまま盃を口へ持つて往つて一口飲んだ。飲んで三敬を見てにやりとした。

「三敬、やつぱり灘の生一本の匂は、格別ぢやぞ、」

三敬は何も云へなかつた。

「は、」

「どうぢや、」

容堂はのこりの酒を飲みほした。愛子は銚子に手をやらうとして躊躇した。容堂は盃を出した。

「一ばいや二はいで、匂が判るか、注げ、」

「は、」

愛子は銚子を持つてなみなみと酌をした。愛子は容堂が薬を飲まうが毒を飲まうがそんなことはどうでもよかつた。容堂ははしやいでゐた。

「注いだか、注いだか、一ばいや二はいぢや、匂が判らん、思ひだして、久作は、どうした、」

「御飯がおすみになつて、下村さんとお話をしてをります、」



「さうか、それぢや、飄輕漢が来たから、出て来いと云へ、」  
呼びには三敬が往かなくてはならなかつた。

「は、」

三敬はすぐ起つて往つた。玩八は宗城に酌をした。

「伊達の殿さま、老公は神技のやうに、すつかり御全快あそばされてをりますが、どうしてこんなに御全快になつたのでございませう、」

容堂は盃を動かした。

「玩八、これぢや、これをやるからぢや、他に薬はない、」

玩八はにこりとして頭をさげた。

「は、」

「それでは、其のほうにもやらう、酒は仙樂ぢや、」

容堂は盃を出した。玩八は手を出して受けた。

「それでは頂戴いたします、」

愛子はそれに酌をしてやつた。

「おい、玩八、その盃を早く返せ、」

「は、」

玩八は急いで飲んで懐紙を出して盃を拭つた。下村啓太郎と小柄な色の白い男が入つて来た。それは秋山久作

であつた。久作はもと容堂の近侍で、戊辰の役には板垣の下で東北に戦ひ、後に左院小説生をやつたこともあつた。

「久作、今に飄輕漢が何かやりだす、見ていけ、」

### 七三

久作は容堂の體が心配で玩八などには些の好奇心ももつてゐなかつた。久作は容堂と宗城を等分に見る處へ座つた。

「おかみ、御酒をめしあがつて、お體にお觸りになるやうなことはございせんか、」

容堂は軽く頭を揺かした。

「大丈夫ぢや、心配すな、其のほうも一ぱいやつて、これから繰りこんだらどうぢや、近いうちに、花魁のときほどきがあると云ふから、今往つておかんと、芳原へはもう往けんぞ、」

久作は莞とした。久作もそれ以上は云へなかつた。啓太郎は久作の左側にゐた。啓太郎は容堂のほうを見て頭をさげた。それは何か云はうとする準備であつた。容堂が見てとつた。

「啓太郎、やほなことを云ふな、それより奴はどうぢや、」

奴とは啓太郎の妾のことであつた。啓太郎は何も云へなかつた。容堂はにやりとした。

「おい、玩八、何かやれ、」

容堂は玩八に盃をさして左右の諫めを防がうとした。玩八は宗城からもらつた盃をかへしたところであつた。玩八は容堂のほうを見た。



「何を御覽にいれませうか、」

「何でもええ、好きなことをやれ、」

「それでは、」

玩入はすぐ起つて懐から赤い襷をだしてあやどり、それから尻ばしよりするなり踊りだした。それは神符降りの狂態になぞらへた踊りであつた。

「えいじやないか、えいじやないか、政事するのは誰たれぞ、右大臣に、左大臣、總裁職に、議定さまに、参與さまがとりしめ、えいじやないか、えいじやないか、都のかたには、土州さんに、薩摩さんに、萩に廣島、名古屋、福井、えいじやないか、えいじやないか、」

えいじやないかの踊りは、如何なる歌でも執りいられるのであつた。玩入は狂人のやうになつて踊り狂つた。容堂はそれを見ながら盃をあけた。

「えいじやないか、えいじやないか、」

久作は玩入がにがしくてたまらなかつた。久作は啓太郎の顔を見た。啓太郎もにがしくてたまらなくと云ふやうな眼づかひをした。

「えいじやないか、えいじやないか、」

玩入の踊は狼藉きはまるものであつた。容堂は盃を持つてゐた。

「おい、すこし休め、玩入、」

玩入はいきなり踊るのをやめた。容堂はそれを眼で招いた。

「一つやらう、」

「へい、」

玩入は尻ばしよりをおろし、襷を除き除り容堂の傍へ往つた。容堂はそれに盃をやつた。

「それ、」

愛子がそれに酌をした。玩入はさすがに汗になつてゐた。玩入は盃をかへした後で頸のまはりの汗を拭うた。容堂がそれを待つてゐた。

「どうだ、くたびれたか、」

「なんともございませぬ、何か御所望がございますか、」

「かつぼれは、どうぢや、」

玩入はすぐ起つた。

「かつぼれ、かつぼれ、」

玩入が踊りだしたところで容堂が不意に起つた。三敬は容堂が便所に往くと思つた。

「おしもでございますか、」

それと同時に容堂の體に異状が見えた。容堂はどたりと俯向けに倒れた。容堂は疾病がまたおきたのであつた。一座は惶惑にとざされた

「あれ、」

「あ、」



「あれ、」

綾瀬草堂の中は、香の匂でむせかへるほどであつた。其の香の匂の鼻口にしみる室の中を數多の人がすこしの聲もたてないで、それであわただしうに右往左往した。それは容堂が不歸の客となつたがためであつた。滑稽優の踊を見てゐて卒倒した容堂は、再び意識を回復することができないで、十日ぐらゐの間ただ僅に脈搏を保つてゐて、其の日になつて歿した。容堂は四十六であつた。

其の日は六月二十日であつた。卒倒してから意識も回復しなければ、藥餌も施すに術のない病人の歸着するところは判つてゐたが、それでもそれがよいよとなる、いまさらのやうに皆が驚き悲しんだ、松平春嶽、伊達宗城をはじめ、交友、有志、山内家十六代の藩主であつた豊範は元より、在京の土佐藩士は陸續として橋場へ駆けつけた。

其の夜遅くなつて板垣退助と福岡孝悌が葬儀のことで協議をはじめた。孝悌は由利公正とともに五箇條の御誓文の起草者として知られた福岡藩次であつた。退助は氣がたつてゐるのか詞が尖つてゐた。

「それやいかん、老公のお遺骸を詰めるぢやないか、」

孝悌は濃厚であつた。

「お遺骸を詰めるが、耐久はおんなしことぢやないか、」

「耐久はおんなしでも、あんな汚い物で詰められるか、」

「それや眞黒いから、汚いやうな氣がするが、木炭は、生木を釜に入れて焼いたものだから、きれいなものぢや

ないか、」

「あんな眞黒い、汚い物が、何がきれいだ、いかん、」

「それなら朱にするかね、」

「朱とも、朱ぢや、老公は、生前朱がお好きで、朱で襷の字もお書きになつたことがある、書には、朱で落款を

捺された、」

「朱で落款は、何人でも捺すぢやないか、書でも畫でも書く者は、皆何人でも捺すぢやないか、」

「捺してもいかん、朱ぢやないといかん、木炭なんか詰められるか、」

「それは、木炭でも朱でも、おんなしことだが、朱は價がはるぢやないか、」

山内家は其の當時非常に金に窮してゐて、葬儀の費用がないので御藤象二郎が其の調達に往つてゐるところであつた。

「それは、はるだらう、」

「だから、木炭にしようぢやないか、」

「さあ、」

退助は不快な顔をして口をつぐんだ。孝悌は何處までも濃厚であつた。

「後藤がどうかするだらうと思ふが、此の際だから、木炭にしようぢやないか、」  
退助は返事をしなかつた。

「本邸には、借金があると云ふぢやないか、」



「あるとも、」

本郎には其の時三百五十兩の借金があつた。

「今度の葬式は、うちわに見つもつても、千五百兩はかかる、締めくりなしにやると倍になるよ、」

「それやさうだ、」

其處へ二人の者が入つて來た。それは吉永良吉と眞田庵であつた。良吉は室へ入るなり退助に呼びかけた。

「板垣さん、ありましたよ、良え處がありました、」

退助が顔をあげた。

「何處だ、」

「鮫洲の別邸の近くですよ、」

二人は勢ひこんで座つた。退助は鮫洲の別邸の傍と聞いて好奇心が動いた。

「傍か、傍にそんなところがあるか、」

「ありますとも、」

「何處だ、」

「間部の下邸ですよ、」

「彼の八幡さまの後の山か、」

「さうですよ、よろしうございませう、」

「手に入るか、」

「間部は勤王の有志が怕いから、入りますよ、」

#### 七四

間部は安政の獄に志士を捕斬した老中間部詮勝であつた。

「當つてみたか、」

「此方が定まつてをりませんから、はつきりしたことは云ひませざつたが、むかふは、入用なら、さしあげてもええと云つてをるさうですよ、」

「さうか、それはええ、後藤が歸つたら相談しよう、思ひだして、君は博識だが、代藩主のお棺に詰める物は、何かね、」

良吉にはちよつとうつらなかつた。

「棺へ詰めると云ひますと、」

退助はせつかちであつた。

「朱か木炭を詰めるぢやないか、其の習慣だよ、」

「それでございますか、」

「それでございますかと云つたものの良吉は知らなかつた。

「知らんか、」

「知りません、」



「よし、それなら何人かに聞く、」

退助はずいと起つた。退助の體には火が燃えてゐるやうに思はれた。退助は脚下に注意はしてゐるが、足に觸る物は片つばしから蹴飛ばして往かうとでもしてゐるやうであつた。退助は次の室へ往つた。

其處は綾瀬草堂の客室であつた。其處には豊範はじめ數多の者が通夜をしてゐたが、故人をしのんでゐるだらう。其處此處でぼそぼそと話す話聲がしてゐた。

退助が入らうとしたところで、内から一人そつと出て來た者があつた。それは山中政次郎であつた。政次郎は退助が眼に映らないのか其のまま擦れ違つて往つた。退助は政次郎と擦れ違ふひやうしに其の横顔へ眼をやつた。

政次郎の顔は悲しきであつた。政次郎は客室を出るなり、玄關のはうへ往つてちよつと足を停めてゐたが、間もなく玄關脇の室へそつと入つて往つた。其處は待待室で、其の晩は必要がないのか燈を置いてなかつた。

政次郎は後を締めるなり容室の遺骸のある客室のはうへ向つて座り、兩手を衝き頭を疊に擦りつけるやうにして何か口の裏で云ひだした。涙が交つてゐるのか鼻を吸つて音がそれにともなつた。そして、それが終ると腰にしてゐた脇指を除つて、諸肌を脱いだ。瘦せて背の高い體が微白く暗い中に浮いて見えた。

政次郎は容室に殉死しようとしてゐるところであつた。政次郎は腹のまほりを數回撫でてから、除つてあつた脇指を脱いでいつぱうの袖で巻き、靜かに其の尖端を持つていつた。

「なむあみだ、」

政次郎は呼吸を調へた。脇指の尖端は腹へいつた。

「相政、待て、」

それは虎の吼えるやうな聲であつた。政次郎ははつとした。同時に襖を障開くやうに開いて飛びこんで來た者があつた。

「老公が赦さんぞ、待て、」

政次郎の脇指を持つた手首はぐつと擱まれた。それは退助であつた。

「不心得なことをしちやいかんぞ、」

殉死と定めてゐる政次郎は、退助の手を擲り拂つて一思ひに死なうとした。

「見のがしておくんない、い、板垣の旦那、」

退助の手は政次郎の左の手首にもかかつてゐた。

「相政、殉死は老公がお嫌ひぢや、」

政次郎はどうすることもできなかつた。政次郎は此のままでは死ねないと思つた。

「板垣の旦那、此の爺は消火人足の賤しい人間ですが、相見たがひと云ふぢやねえのですか、あんたは公議の役人で、大事の體だが、わつしは、用のない人間だ、御隠居さまに追つついて、牛でも馬でも、なれる物に生をかへて、最後のお伴がしてえのです、どうか板垣の旦那、」

政次郎はそこでまた退助の手を揮り放さうとしたが放れなかつた。

「いかなぞ、相政、老公のお伴をしたい者は、おまへばかりぢやない、土佐の藩士は、皆お伴をしたいが、それはならん、」



「それはさうでござえやせうが、板垣の旦那、此の爺の申すことも、一とほり聞いておくんない、わつしが土佐のお抱へになつたのは、弘化三年の五月、指をれば、二十八年になります、其の間何一つしたこともねえのに、御隠居さまは、お目をおかけくたされて、御扶持のうへに、いろいろのくだされ物、山中と云ふ苗字までくだされまして、それを山内と云ふ心で名乗れとの分にすぎたお詞、それに、土佐龜甲の紋どころ、明治元年には、帯刀までお許しください、人入家業のしがねえ野郎が、江戸の相政とたてられるやうになつたのも、皆、御隠居さまの御高恩、その大恩ある御隠居さまが、五十にも足らないでお致くなりなすつて、六十にあまる此の爺が、おめおめと生てゐられませうか、どうか旦那、ここん處を聞きわけて、どうか見のがしておくんない、」

退助の頭を揮るのが暗い中にも感ぜられた。

「いかにぞ、相政、おまへは老公ばかりのことを云つてをるが、當主のことも思はんか、おまへを消防に雇ひれたは、土佐藩ぢや、さうすれば、當主の豊範公にも大恩があるはずぢや、」

其の時明るい燈が射して入つて來た者があつた。それは豊範と後藤象二郎であつた。象二郎は燭臺を持つてゐた。

「相政、今、其處で聞いてゐた、おまへの心はよくわかるが、それはいかにぞ、それに老公のお葬式のさきやりは、おまへでないといかん、お葬式をどこほりなくやつてくれるが、おまへが老公への最後の御奉公ぢや、これから相談がある、來てくれ、」

政次郎はもうどうすることもできなかつた。退助がきあひをかけるやうに云つた。

「とにかく放せ、」

それは脇指を放せと云ふのであつた。政次郎はしかたなしに放して俯向いた。退助はそれを鞘に収めた。豊範が待つてゐた。

「爺、葬式を頼むぞ、」

「は、」

政次郎は両手を揃いて顔をふせた。政次郎は泣きだしたのであつた。

「後藤、」

豊範が出て往くので象二郎は跟いて往つた。室の出口に愛子が立つてゐた。象二郎はそれを見るなり足をあげて蹴つた。

「あ、」

愛子はひつくりかへつた。象二郎のこれも虎の吼えるやうな聲がした。

「此の不忠漢、」

退助は急いで外へ出た。象二郎は二度目の足をあげてゐた。

「此の恩知らず、」

象二郎は其の夜のうちに愛子を箱崎の本邸にある北の長屋へ押しこめた。

そして、二日の後に容堂の葬儀を執り行つた。場所は大井の間部山、間部詮勝は下總守と稱してゐたので、其の山にはまた下總山と云ふ名があつた。



葬儀には廟堂の大官、紳士、有士、土佐藩士、力士、俳優、それはありとあらゆる階級の者が参列したが、途中で靈柩車にした馬車の機が折れたので、その日は箱崎の本邸に引きかへし、翌日になつて改めて送葬した。参列者は、薤上の露何ぞ暗え易き、露降ゆるも明朝更に復た落つ、の薤露の歌は歌はなかつたが、何人の心にも薤の葉におく露のやうなほかない人世の姿が映つてゐたことであらう。その時送葬の行列は、先頭が既に品川に達してゐるのに後列はまだ芝の大門にゐた。

旋風時代 第三卷(完)

昭和九年三月三十日印刷		旋風時代 第三卷	
昭和九年四月一日發行		定價一圓二十錢	
著者	田中貢太郎	發行者	木田 開
檢印	日永 悌三	印刷者	東京市麹町區有樂町一丁目十三番地
發行所	東京市麹町區丸の内二丁目丸の内ビルディング五九二區	中央公論社	振替口座 東京三四番 電話丸の内 五五五五 三五三三 八七六五番

株式會社恒有社印刷



# 旋風時代

田中貢太郎 熱著

第一卷 同時  
第二卷 同時  
第三卷 發賣

讀者に告ぐ!!

この作の眞價は活字を以て讀書子に訴へるべきではない。そんな手は古い。この作の眞價を知るものは、誰でもない

讀者自身であるからだ。これこそ、國籍をもつた生ツ粹の日本文學だ。第一卷の第一行を讀んだ讀者は、全卷一千五百頁、二萬五千五百行を讀むことを約束したも同様だ。

三卷同時發賣は、讀者の嵐のやうなこの熱望、このアンコールに酬いるために外ならない。乞ふ賞讀。(各卷約五百頁、各定價金一圓二十錢)

## 重版たまたまの藝術的大衆小説

モテル小説	結婚街道	菊池 寛	出版部裝幀	定價一圓二十錢
モテル小説	男裝の麗人	村松梢風	岩田專太郎裝幀	定價一圓三十錢
モテル小説	眞理の春	細田民樹	玉村善之助裝幀	定價一圓五十錢
小説	この太陽	牧 逸馬	中川一政裝幀	定價一圓七十錢
小説	暴風	帶下村千秋	山六郎裝幀	定價一圓五十錢
小説	限りなき舗道	北村小松	岩田專太郎裝幀	定價一圓六十錢
小説	情炎の都市	北村小松	岩田專太郎裝幀	定價一圓五十錢
小説	黄昏の薔薇	徳田秋聲	富田千秋裝幀	定價一圓五十錢
小説	光・罪と共に	直木三十五	裕伊之助裝幀	定價一圓五十錢
小説	日本の戦慄	直木三十五	武藤夜舟裝幀	定價一圓五十錢
小説	濡れ闇の男	長谷川 伸	岩田專太郎裝幀	定價一圓
小説	旋風時代(全三卷)	田中貢太郎	田中咄哉州裝幀	定價各册一圓廿錢

中央公論社出版部



書の遠永る誇に界世・品神の苑藝

隨筆	梯の	薔坪内逍遙	平福百穂裝幀 定價一圓半錢 菊判三二〇頁 送料十四錢
隨筆	荷風隨筆	永井荷風	著者自裝 定價一圓半錢 四六判四九〇頁 送料十四錢
隨筆	青春物語	谷崎潤一郎	木下李太郎裝幀 定價一圓半錢 四六判二四〇頁 送料十四錢
評論	文壇人物評論	正宗白鳥	出版部裝幀 定價一圓半錢 四六判四八〇頁 送料十四錢
小説	寢園	橫光利一	佐野繁次郎裝幀 定價一圓半錢 四六判四一八頁 送料十四錢
小説	つゆのあとさき	永井荷風	著者自裝 定價一圓半錢 四六判四五六頁 送料十四錢
小説	盲目物語	谷崎潤一郎	著者自裝 定價一圓半錢 四六判倍判和綴 送料十四錢
小説	女の一生	山本有三	中村研一裝幀 定價一圓半錢 四六判七八二頁 送料十四錢
小説	神風連	(上下二卷) 十一谷義三郎	川端龍子裝幀 定價一圓半錢 四六判上卷七八七頁 下卷七五〇頁 送料各十四錢

部版出社論公央中

寶至の本讀民國本日

現代人物評論	馬場恒吾	四六判五〇〇頁 定價一・五〇〇
政界人物評論	馬場恒吾	四六判五〇〇頁 定價一・五〇〇
議會政治論	馬場恒吾	四六判五〇〇頁 定價一・五〇〇
唯物辨證法讀本	大森義太郎	四六判三五〇頁 定價一・二〇〇
金の經濟學	猪俣津南雄	四六判一〇〇〇頁 定價一・五〇〇
文章讀本	谷崎潤一郎	近刊
レコード音樂讀本	野村光一	四六判六九〇頁 定價一・八〇〇
日本合戰譚	菊池寛	鈴木朱雀裝幀 四六判五二二頁 定價一・五〇〇
武藏野から大東京へ	白石實三	池田永一治裝幀 四六判四二〇頁 定價一・四〇〇

部版出社論公央中



4925  
箱

作者が身を以て描く一代の傑作

歴史小説 楠木正成 直木三十五 鈴木朱雀挿畫 定價一圓廿錢  
岩田專太郎裝幀 送料 十四錢  
四六判・五〇〇頁

モラル小説 沈丁 花久米正雄 津田青楓裝幀 定價一圓五十錢  
四六判 五五〇頁 送料 十四錢

モラル小説 青 年林 房雄 木村莊八裝幀 定價一圓五十錢  
四六判 五五〇頁 送料 十四錢

モラル小説 U新聞年代記 上司小劍 石井鶴三裝幀 定價一圓五十錢  
四六判 三五〇頁 送料 十四錢

最新刊 直木三十五隨筆集 四六判 定價一圓五十錢  
六五〇頁 送料 十四錢

中央公論社出版部



656

~~173~~

F/3

TAD43

(3)



終

